

優秀賞（国土交通事務次官賞）

△作文（中学生）の部▽

『人と自然の共存』

和歌山県近畿大学附属和歌山中学校 二年 庵野 真代

「自然の力は怖い。」私はつくづく思った。

今から約一年半前東日本大震災が起き、一年前には台風十二号によって和歌山県南部や奈良県の一部が壊滅的被害にあった。

台風が来た当時、テレビのニュースでは川が氾濫し、家屋が浸水している様子や地すべりやがけ崩れの痕、土砂ダムの決壊寸前の様子が幾度となく放送された。

この数年間では地震、台風、竜巻などの自然災害が発生している。

今回は昨年台風十二号の被害について書こうと思う。

今年の八月上旬、機会があり紀南の那智勝浦町に行くことがあった。和歌山市在住の私は台風の被害については昨年テレビで見ただけで今、現地がどうなっているのかなど思いもしなかった。

目的地に着くまでに、私は一年前の台風の威力を思い知った。それは、テレビで放送されていた時の驚きを絶するものだった。

那智勝浦町に着くまで車で約三時間以上がかかった。出発してあと一時間程となった時、車の外の景色に異変を感じた。それは、山道を車で走っていたときの事だった。

初めは何気なく外を見ていた私だったのだが目の前の山を見た時、目を見張った。山肌が残酷にもあらわになっているのである。それは言葉では言い表せない位、衝撃的であった。私が見た時に思ったこと、それは『地元の方々はどれ程怖かったのだろう。』ということである。大雨が降り、山が崩れてくるということを私は体験したことがない。しかし今回、この傷跡を見たことによって台風の威力を身をもって体験できたように思う。

被害の痕は一つ、二つのレベルではなかった。徐々に南下していくにつれ、被害は多くなっていた。いくつもの台風の傷跡の中には川が氾濫した痕もあった。テレビで見ていた時でさえ被害の甚大さが伝わってきた上、あれほどの影響を及ぼしているのだからさぞかし大きな川なんだろうと思っていた。しかし、実際は川幅はあまりなかった。今、たくさんの川には流木や岩が至る所に集積されている。また、がけ崩れの痕も多く見受けられた。

だが、被害の痕が残っている一方で復旧作業も行われていた。がけ崩れの痕には土嚢が何段にも積まれ、追いつかない所はトラックで岩を運び出していた。川の色はまだ濁っていてがけ崩れの痕もまだまだあったが、地元の方たちの助け合いの心が感じられた。

一年たった今でもまだ台風の爪痕が残っている。それほど大きい台風だったことを静かに物語っていた。この怖さは、体験した人しか分からないものだと思う。だからこそ次、このような台風が来た時の対策を考えなくてはならないと思う。

例えば、氾濫した川に堤防を作る、緩んだ地盤を補強し、より強くする、避難勧告が出たらすぐに避難しなければならぬなどがあると私は思う。

人間が自然に立ち向かい勝つこと、つまり何にも影響をださずに終息させることは困難である。だからこそ、たくさんの人が体験したであろうこの恐怖を後世に受け継ぐことが大事であり、身を守るためにいかすことも大切だと思う。

自然は時に人々を守り、癒し、共にこの地球上にある。けれども、ときに人の命までも脅かす。人と自然が共存していくためには、正確な判断と日頃の訓練や備えが必然であると私は思った。

今回の台風十二号のことで、テレビで見ると実際に見るのとでは、全く違うことが分かった。

自然というものは、人間よりも遙かに大きな存在であることを言っているかのように私自身、感じられるようではない。